

# 題目 学校・家庭・地域の連携による教育とコミュニティ活性化に関する一考察

指導教官 山口健二

発表者 金坂 唯

## 1、題目設定の理由

教育基本法の改正や学習指導要領の改訂において、中央教育審議会の答申などには学校と家庭及び地域の連携について述べられている。学校・家庭・地域それぞれの教育力の低下が叫ばれるようになった現代においては三者の連携協力は必須であるとされている。

そこで、学校と家庭・学校と地域のそれぞれが連携している例を調べていくうちに、学校を中心として三者の連携が上手く取れている地域では地域住民どうしのつながりも強く、コミュニティ自体も活性化し魅力的なものとなっていることが分かってきた。私は子どもの教育における三者の役割を明らかにしながら、三者の連携のための施策や実践を分析する。その後、学校と家庭・地域の連携及びコミュニティ活性化のための方法を検討していきたい。

## 2、論文構成

第一章 はじめに―本論文の構成

第二章 教育における役割

第一節 子どもたちの抱える課題と教育における三者の役割

第二節 P T Aの役割

第三節 小学校の機能

第三章 島根県のふるさと教育

第一節 学校支援地域本部事業

第二節 島根県の目指す教育とふるさと教育のねらい

第三節 ふるさと教育の実践例

第四節 実践例から見る島根県の教育の長所と短所

第四章 千葉県習志野市立秋津小学校及び秋津コミュニティ

第一節 コミュニティ・スクール

第二節 秋津地区と校舎開放

第三節 子どもたちと地域の人々とのかかわり合い

第四節 秋津内移動、U・I ターン者が多い理由

第五章 終わりに

## 3、論文の概要

### <第二章 教育における役割>

本章第一節では、教育における学校・家庭・地域それぞれに期待される役割を教育基本法や中央教育審議会答申などから読み取り、そこから子どもたちの抱える課題やコミュニティの抱える課題を明らかにしていく。学校では子どもたちの規範意識の低下などを踏まえての道德教育の充実、地域においては体験活動の充実、家庭には子どもたちに基本的な生活習慣を身につけさせることが期待される役割として読み取ることができる。次に第二節においては、教育において三者の連携が図られるために重要となり得るP T Aの役割と課題を文献等から明らかにし、コミュニティの活性化との関連を考える。そして第三節では、連携の中心になる学校の機能について明らかにしたい。岸裕司によるとコミュニティ活性化のためには小学校が拠点となるのが最適とし、小学校には三つの機能があるとしている。それは、学ぶ機能、施設、「子

縁」の普及化と共有であり、それぞれについて実践例を取り上げながら分析する。

### <第三章 島根県のふるさと教育>

本章では、学校と家庭及び地域が連携している実践例を取り上げ分析し、コミュニティの活性化との関連を考える。まず第一節では、文部科学省が本年度から実施した学校支援地域本部事業を取り上げ、その仕組みや期待される効果を分析していく。次に第二節以降では、私の出身地島根県での教育（主にふるさと教育）について取り上げる。まずは島根県の目指す教育や育てたい子ども像を「しまね教育ビジョン21」などから明らかにする。そこで実際に学校と地域・家庭が連携している実践例を取り上げ、島根県のこれまでの実践の成果とこれからの課題を明らかにする。成果としては学校と家庭、学校と地域それぞれの関係が密になったこと、教職員の意識改革などがある。課題としてはコミュニティ内での住民のつながりが弱いことなどが考えられる。

### <第四章 千葉県習志野市立秋津小学校及び秋津コミュニティ>

本章ではコミュニティ内の住民同士のつながりが強く、学校と地域が密な関係を持つ例として千葉県習志野市立秋津小学校を取り上げる。秋津小学校は校舎の一部をコミュニティ・ルームとして地域に開放している。その開放により地域住民の学びの場を提供するだけでなく、子どもたちと地域の人々とのかかわり合いや、教職員とコミュニティに所属するサークルによる授業の協働など教育的な効果が生まれている。また、学校がコミュニティの中心となることで、地域住民同士のつながりを持たせるきっかけを提供していることが分析できる。そこで秋津小学校及び秋津コミュニティの実践から、学校と地域の連携の有益性や、地域住民のつながりの強化及びコミュニティの活性化により生まれる効果などを調べていく。

そこで本章ではまずは第一節でコミュニティ・スクールを取り上げその経緯と仕組みを紹介する。第二節では、秋津地区の歴史と秋津実践の最大の特徴である小学校の校舎開放について紹介し、実際に校舎を地域へと開放する際の工夫などを分析する。第三節では、コミュニティの存在による、秋津地区の子どもたちと地域の人々とのかかわり合いを取り上げていきたい。これらを踏まえて第四節では、秋津内移動やU・Iターン者が多い理由を明確にし、地域住民同士のつながりを深めることやコミュニティの活性化がもたらす効果について考えていきたい。

## 4、今後の課題

秋津地区やコミュニティ・スクール指定校の実践例から、学校からコミュニティ内の住民同士のつながりを深める方法を取り上げたが、それらの方法が島根県で応用できるようにまずはふるさと教育の充実を図りたい。まだ本論文ではふるさと教育の充実の方法まで検討できていないが、実際に学校現場で働いている中で、地域に根ざした教育を行うことで学校と家庭と地域の三者が密な関係を持てるように努めたい。そうすることで、ふるさとに愛着を持つ子どもたちを育てる方法やコミュニティ内の住民同士のつながりを深める方法を探し、コミュニティの活性化に貢献したい。

## 5、主要参考文献

- ・中央教育審議会答申、2003、「新しい時代にふさわしい教育基本法の在り方について」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/030301c.html](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/030301c.html)
- ・安彦忠彦監修、無藤隆・寺崎千秋編著、2008年、『小学校学習指導要領の解説と展開 総則編』
- ・岸裕司著、2008、『学校開放でまち育て サステイナブルタウンをめざして』学芸出版
- ・島根県教育委員会、2008年改訂、「しまね教育ビジョン21～ふるさとを愛し、未来を切り拓く子どもを育む～」 <http://www.pref.shimane.lg.jp/kyoikuiinkai/iinkai/vision21/vision21.data/vision21.pdf>